大日本國開闢由來記

首卷

へ13
2697
7—1

宗教図書

大日本皇國開闢由來記

門へ伊13
2697
巻 1-7

大日本國開闢由来記序

大霊寰宇一夢場也。王公士庶一夢中之人也。盛衰興廢一夢境也。笑傲悲歎一夢境中之態也。前夢既覺後夢嗣發。古往今來。

均是人一夢場之人視息
一夢境之中真所謂大夢
者乎一夢道人吐歲頻寢
凶禍或忽遇魑魅罔兩魂
褫氣懾或為雷火所擊搏
鐙愕昏顛又或忽大地震

裂身埋没於黄泉下或乃
海沸河決漂蕩屋舍身葬
於魚腹中苦楚百端覺後
仍毛竦心悸惴惴然不安
猶在魘夢中每寢如此既
已有年憶是耄耋日至心

怯志摧氣體凋瘁上下之
氣否塞不交通之所致乎
嗚呼我既在一夢場中則
夢此凶禍其亦奚怪哉雖
然莊蒙有言夢飲酒者旦
而哭泣夢哭泣者旦而田

獵方其夢也不知夢也旦
有大覺而後知此大夢由
是占之則凶夢即吉寤妖
孽即禎祥亦未可知也要
之均是我與彼同在一夢
場中爲一夢中之人則其

所見所聞。俱是一𤸷境中之夢乎。今綴此編。嗹喋焉。譚皇國寶祚之隆。土地之秀。在四海萬國之上。則外虜覬覦不足怖焉。亦是得非大夢未覺。狂心未歇

而夢中譚夢者乎。若果如莊蒙之言。則萬世之後。一遇真人興。得忽然破夢而出。則夢塲夢境。與夢中之人。一切雲消霧散。而日月星辰。國土山川。神人萬物。

將與我合爲一矣夫然後
始可人知夢境中譚寢之
大夢也耳時安政丙辰歲
冬梢一夢道人自誌於一
夢場中

松雨漁夫書

日本國開闢由來記

目次

編中所記神人出像
景行天皇御宇徑槁僵歷木上往來國
歷木非扶桑木辯
凡例
卷一　第一
襲雲神劍出現世間永護國家
大少二神經營天下建鴻業基
卷二　第二
經津主武雷二神能定君臨地
授平國之廣矛退幽冥爲保護
第三
神器照世間寶祚與天壤無窮
嘲木花開耶媛證靈威於產室
卷三　第四
依東征功績恢弘天業於宇內
背負日神之威隨影壓蹣賊虜
第五
志存必克誠軍將戰勝自夸者

饒速日能知天人際帥衆歸順

卷四　第六

開掖庭於檀原地八紘咸爲宇

衢神預卜宮處御裳濯川流清

第七

景行西顧專殫力於驅除平定

小鬘刺賊表德於日本武尊號

卷五　第八

示威旆德邊裔青人草隨風靡

三嘆憫嬬傾義靈還反照暘谷

第九

留靈於神劍光耿炳於千歲後

八十綱誓不虛坤輿將歸皇化

卷六　第十

世道自逐氣運隨時轉變無住

異域敎法爲尊後回護我神道

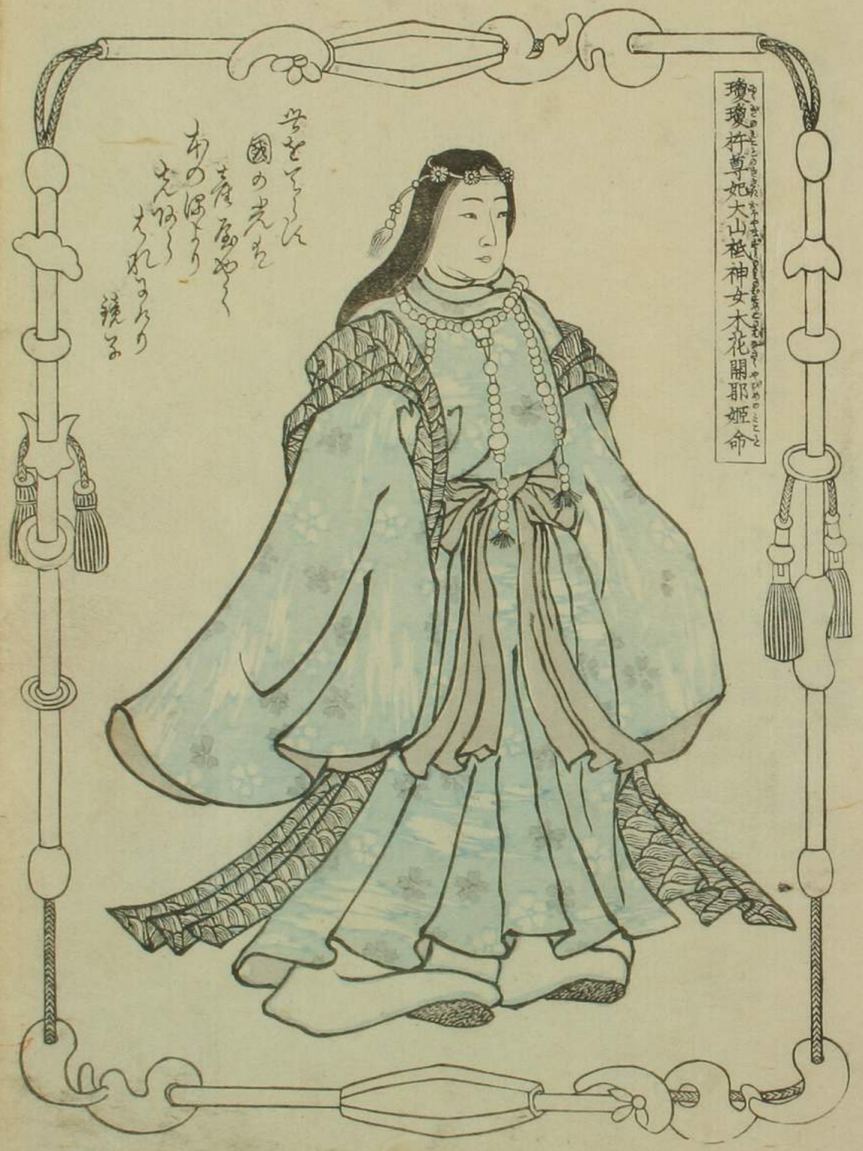
第十一

國家衛氣生隙外虜起覬覦心

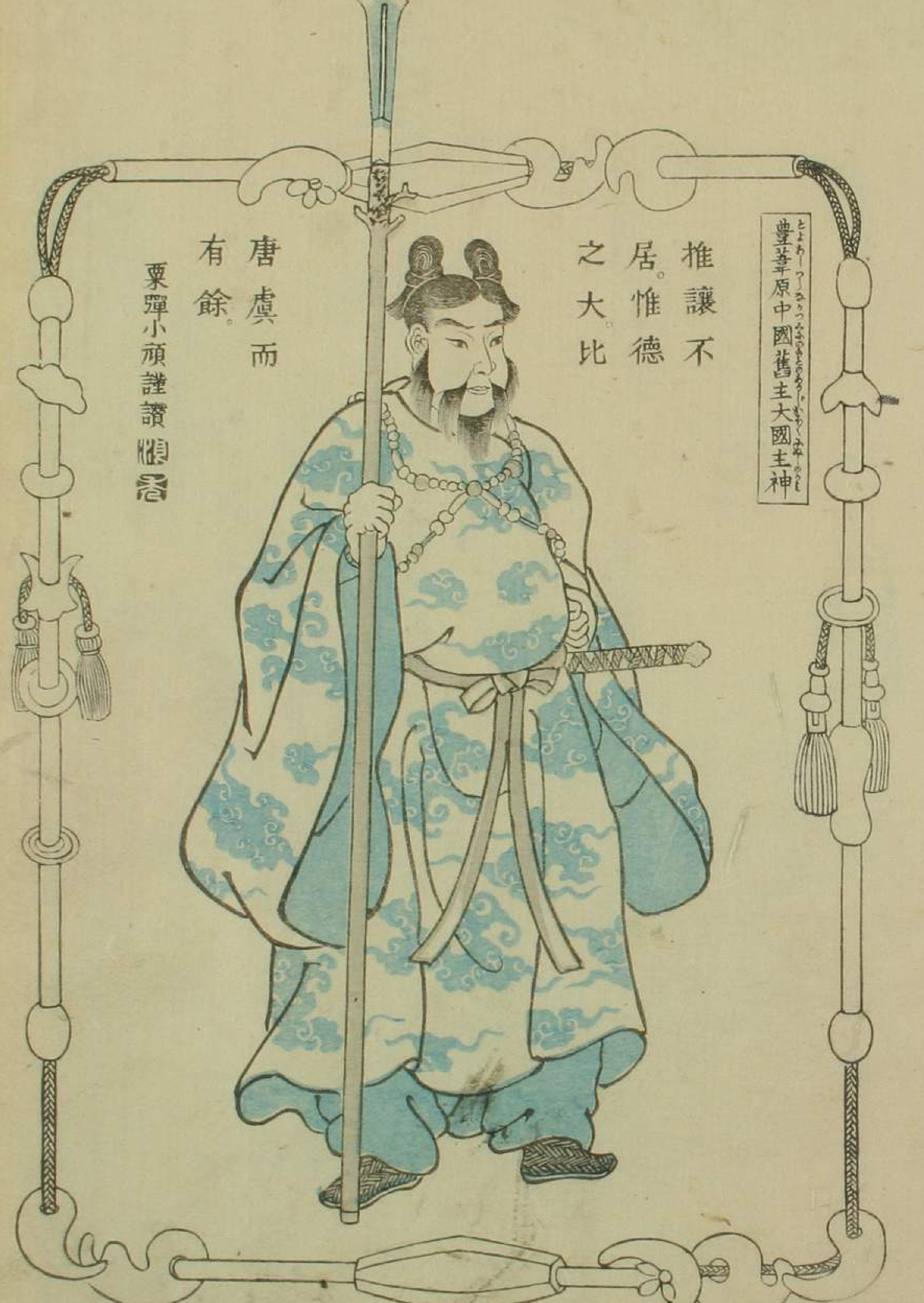
八咫鏡放靈光神風覆沒敵船

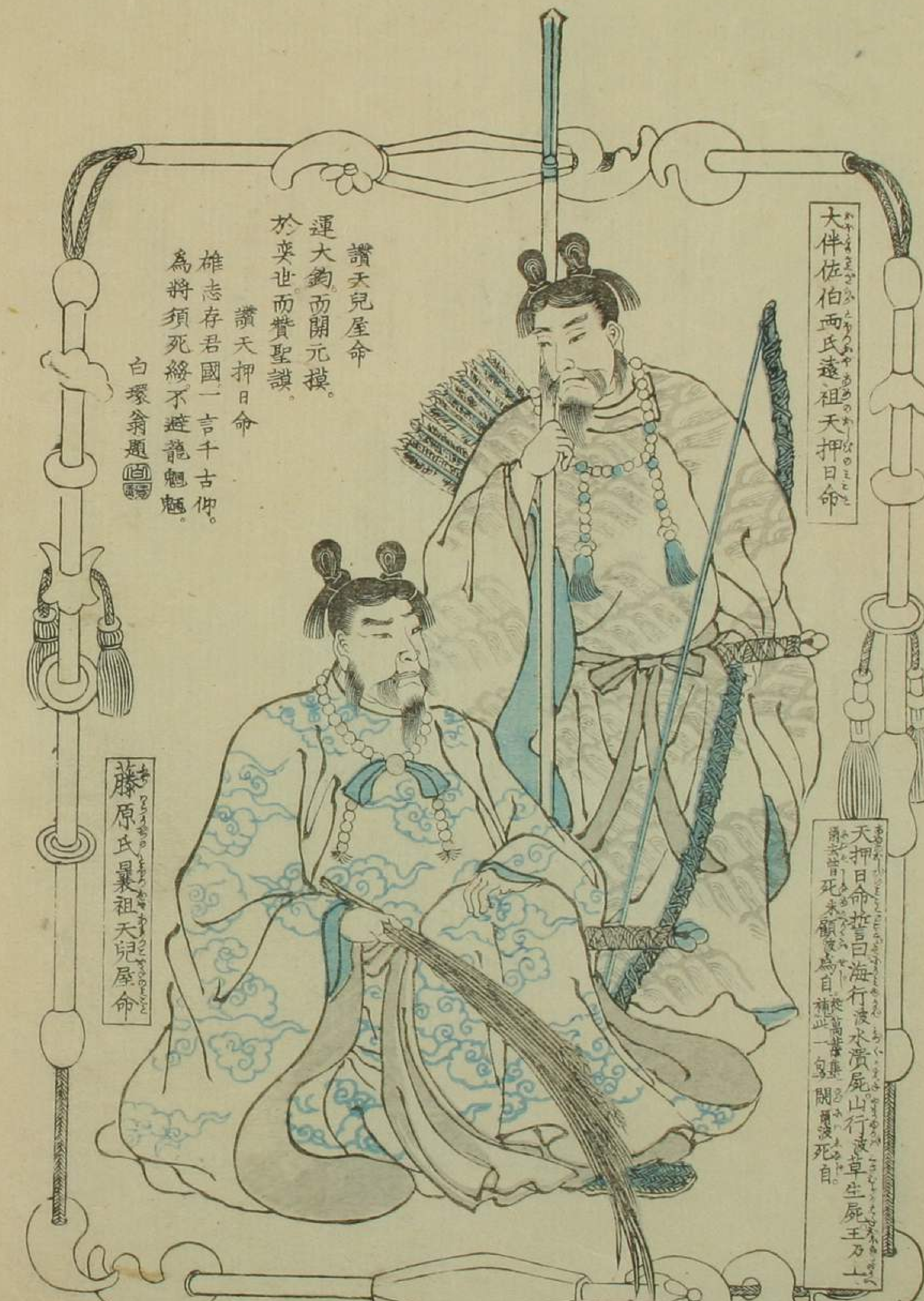
○編末載胡元書牘二狀釋之

天津日高彦火瓊瓊杵尊
鶴鶴子謹賛
心在王室


瓊瓊杵尊妃大山祇神女木花開耶姫命

猿田彦大神
雀子
庚申は猿田彦の神を祭るなり源の順が庚申を詠る
歌に沖中の得ざるところあき釣船は蜑やさむざる魚や
きれぶ沖中のえざるは翁庚申と物の名をよめる
あるまま蹴鞠の神として祭るが故に蹴鞠に庚申の日を尊ぶ
用ゐられり
天鈿女命


豐葦原中國舊主大國主神
推讓不
居。惟德
之大。比
唐虞而
有餘。
栗躍小頑謹讚

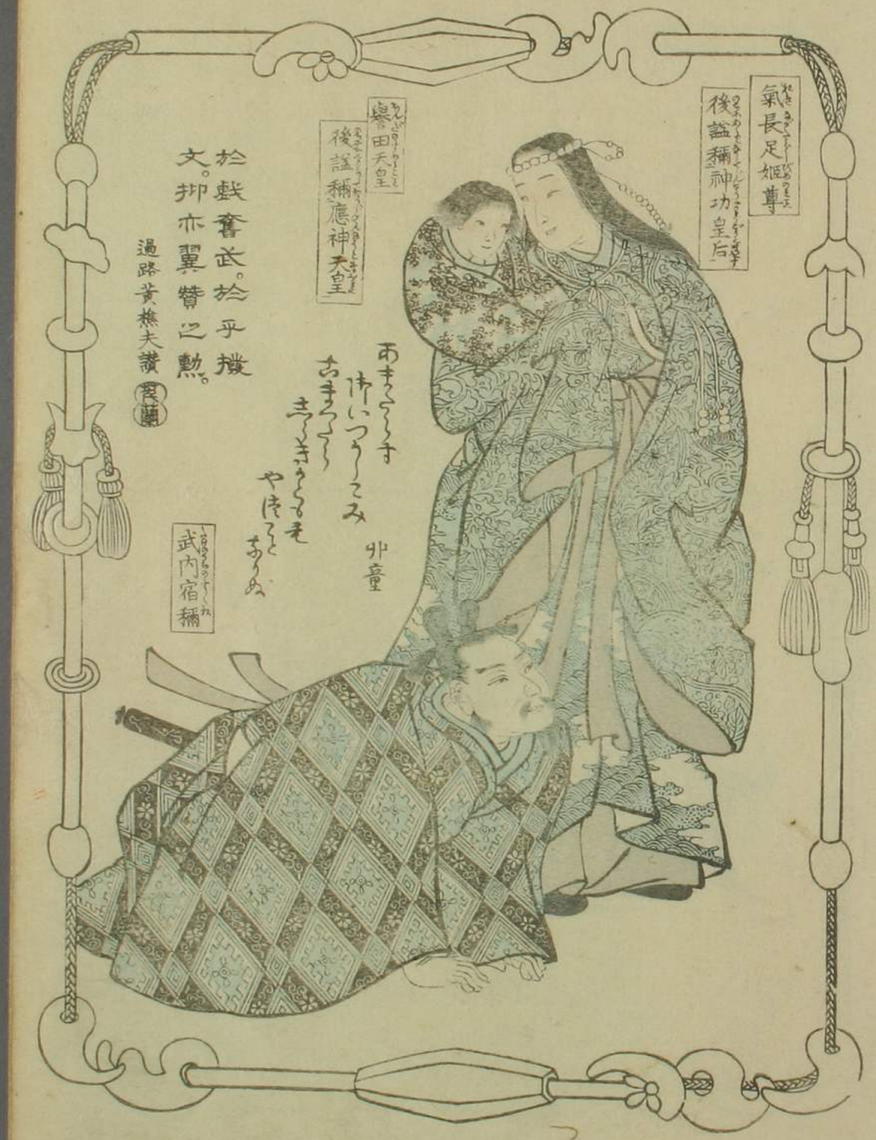


大伴佐伯両氏遠祖天押日命
讃天兒屋命
運大鈞而開元模。
於奕世而贊聖謨。
讃天押日命
雄志存君國一言千古仰。
為將須死綏不避龍魍魅。
白塚翁題
藤原氏鼻祖天兒屋命
天押日命誓曰海行波水漬屍山行波草生屍王乃上
死米顧波為自

神日本磐余彦天皇
後謚稱神武天皇
易稱。聰明睿智。
神武而不殺。唯夫
不殺。所以為
神武歟。
雀翁謹讚
神武天皇之皇后事代主神女媛蹈鞴五十鈴媛命

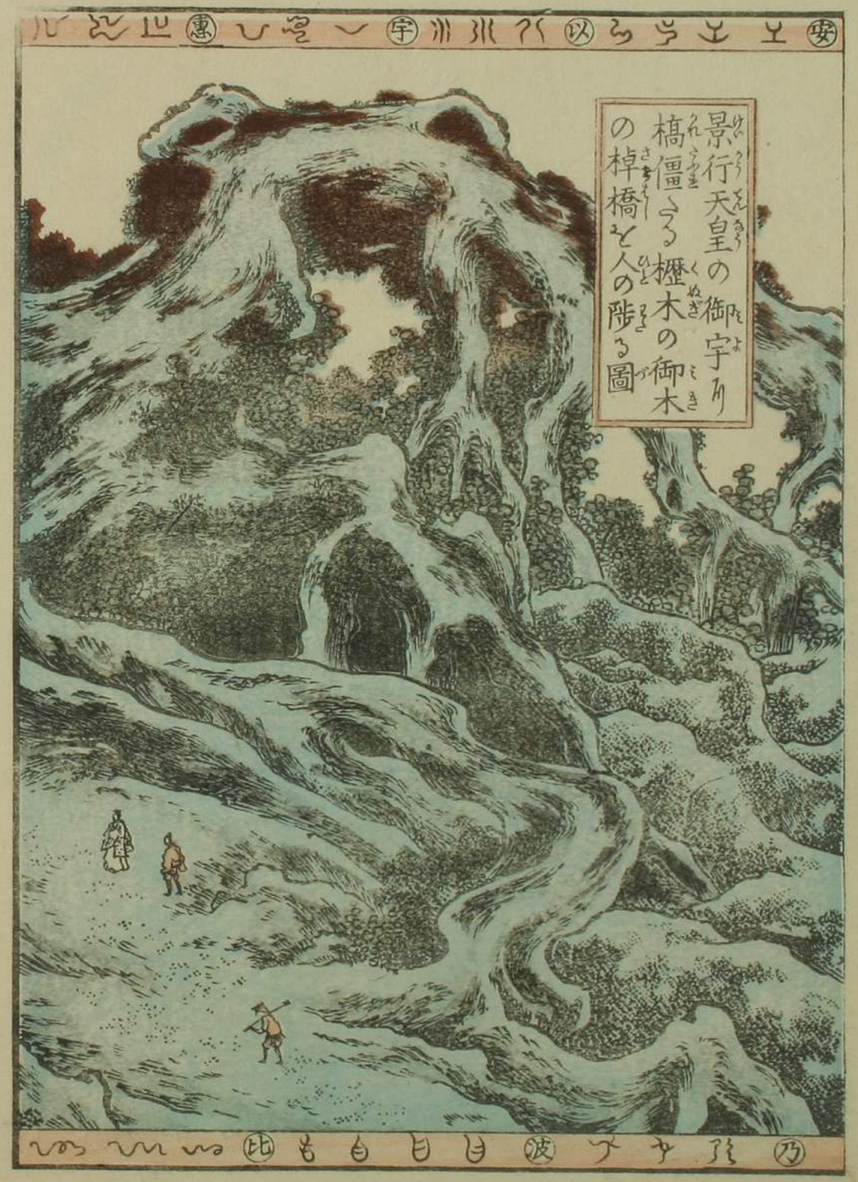
日本武尊之妃穂積氏忍山宿禰女弟橘姫
小碓命後稱日本武尊
弟橘媛將沒海時詠歌
胸刺相武能小野通燃火能
火中通立而訪斯君哉
克戡亂。克遏
劉。於戲。永世
克休。
佩鶴童子謹讃

彦火火出見尊妃海神之女豐玉姫命
住吉小龍宮といひしは琉球なり。
流求瑠球とかきしものと音相近。
且琉球國は日向の南にあり海路
も遠しかれば此方とれば住吉
しものを豐玉姫は琉球國王の女
なりとは先人既ふれたりあり
ぞ空しかれど婆羅羅龍宮と
いひし類なるべし此神を祭る本
文は海神の女とあるべし


氣長足姫尊
後諡稱神功皇后
譽田天皇
後諡稱應神天皇
武内宿禰
あまくもす
いかづちみ
おまろかも
きらきらる
やきてと
まろめ
小童
於戲奮武。於乎撥
文。抑亦翼贊之勲。
過路黄檗夫讃

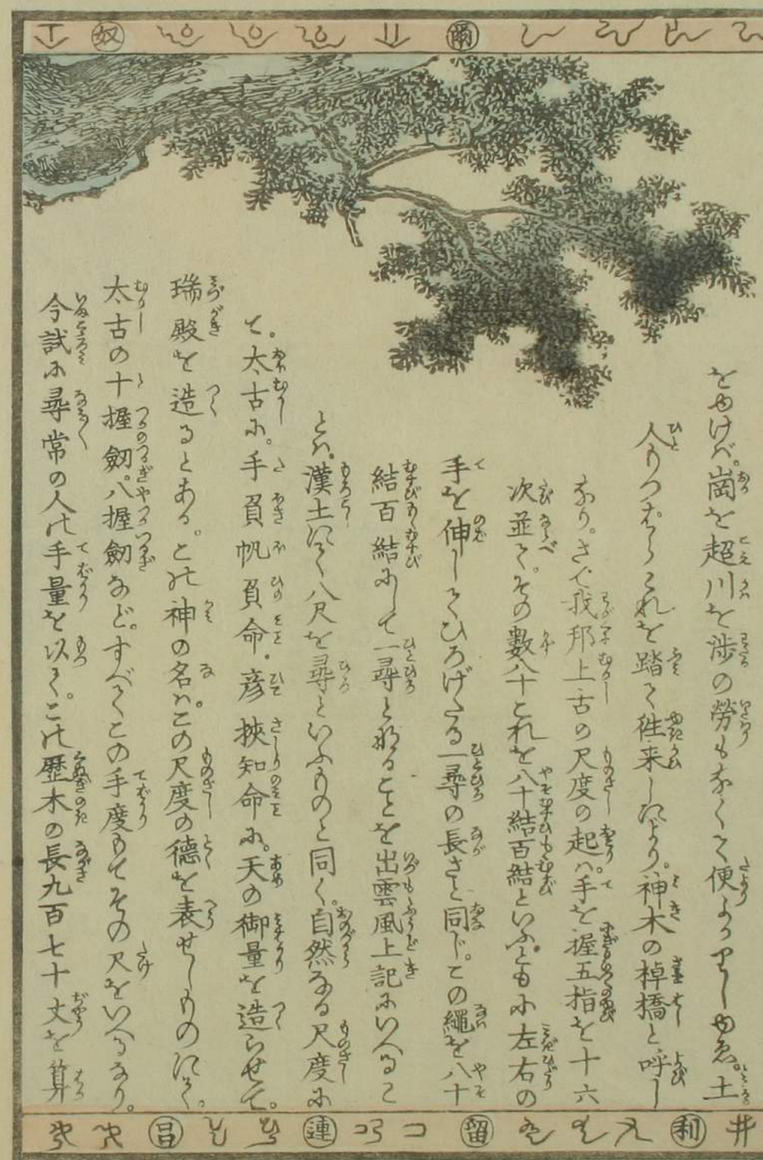
大伴氏遠祖日臣命
賜名稱道臣命
能出其不意。斯可以立
偉効乎談笑之間。
信乎兵家之機。以至
易行乎至艱。
半角題

厩戸皇子
後諡稱聖德太子
誰料一国
好異之
法。
乃聽ゐ
歳
不孰之
墓。
渡嶋漁史題
如意国
北條相摸守平時宗
唯夫豪邁
英斷之氣。
足以興士
志。
信乎神風
蕩冠之感。
足以破鬼
膽。
蘿蔔散人讃
神風は
大海を吹きたて
まつひらくにん
うゝの使を
射殺る


景行天皇の御宇の
槁僵くる櫪木の御木
の棹橋を人の陟る圖

此歌のさとしひとのふの助辭なり説ふ棹橋なりともつり紀ふい佐鳥ふつくるとりい通音也

景行天皇の御宇十二年日向の國なる熊襲叛て朝貢を奉らさるに。天皇御身みづから筑紫の行幸すしくて。これを征平らぬひく。筑紫の御木といふ地に行宮を造らせて留居さまふ。此地に大なる櫪木あり其長九百七十丈朝日の暉に杵島山を隱し。夕日の暉に肥後の阿蘇山を覆せり。土人この樹を神木ありといふなり。その地の名をも神木とよびしとぞ。もろもろの樹おのれと橋て



僵ふけとど。そのあくうに家宅もあくざろけまバ人を損ことなくしとあり。その木は上をあけバ。崗を超川を渉の勞もおくて便よろ。ゆゑ。土人りつぺ〜これを踏く往来しひろ。神木の棹橋と呼ー

あり。さて我邦上古の尺度の起ハ。手を握五指を十六次並べ。その數八十これを八十結百結といふ。また左右の手を伸ーてひろげる一尋の長さと同じ。この繩を八十結百結みて一尋とすることを出雲風上記ふいくること。漢土にく八尺を尋といふのと同く。自然なる尺度ふ。太古ふ。手負帆負命。彦挟知命ね。天の御量を造らねそ。瑞殿を造るとある。これ神の名。この尺度の德を表せりのにく。太古の十握劍パ握劍ねど。すべてこの手度りてその尺をいくるあり。今試ふ尋常の人ハ手量を以て。これ歷木の長九百七十丈を算

ばバ。大略今の曲尺の六百丈ばかりをあれバ。十六七町許の高さ。あり。手幅の廣きものにてもろくても。七百丈餘ある。べれバ稍二十町ふハ過べ。くべ。かく云漢土のうるくる。我得ざるらば。然バこれを扶桑樹ありくハいひ。くかくべ。これを今我以て。あれをうれバ。實ふ怪異ものなりどの太樹ふあんありける。天皇高田の行宮ヲ御坐まくる。百寮ものこの樹の上を踏て往来ける。我時の人乃ちて。御木の棹橋云の歌を詠ーなり。此地ハ今の筑後國三池郡高泉村ふ。その舊跡今も現ふ

殘て。其土中より木理堅實にして。これを往古の歷木の埋木なるべしと思ひ。その地に御幸橋と呼なしたるところあれば。三木は御木を訛り。高泉は高田を訛るなるべしと。柳川の武藤陳亮といふ人は。中島廣足が歷木辨の序に記るは。その國は人多く。地も豊沃なること異方に超られば。人少く田畠も多く。左もあるべしと思ひ。我邦は土地豊沃なること異方に超られば。人少く田畠も多く。ざる頃はいとその膏腴なる所の生氣がかのづから地中に盈溢て。世界に希なる大木も多く生繁なるが。人漸に衆くなりて。地氣を稟る物増多に從て。おひくゝは槁ぬれば。まづは殊更に斫せなどして。殘りの少くなりゆきて。ものの多くは。さることは歷木は土地廣く住人も多くぬ筑紫の地なるべし。

景行天皇の御宇までも。なほ殘て在しものなるべし。此やうに。仁德天皇の御宇に斬せさせ給ひしより樹の影乃。且日あい淡路島にかたぶく夕陽にはい高安山を越うと。古事記にもとゝるも。其大さ歷木に劣らじ。肥前風土記に。樟の大樹の朝は日影に杵島郡に蒲川を蔽ひ暮の日影に養父郡の草積山を蔽ひ。播磨風土記に明石驛駒手御井の楠は朝日にはい淡路嶋を蔭し。夕日あい大和島根をゝひとゝひまで近江國栗本郡の栗樹の圍は五百尋ありて。その影の朝に

はい冊波國にまで。夕にはい伊勢の國にまさすれば。偶その邊に住居せし農民の田畠にこの栗樹の蔭に覆はれて成實ざりしを。漢申て伐せられしを。今昔物語に記るが。これは此歷木に劣ぬ樹は。虞にはあれども明らかに。今の世にも下野國如寶山の蔓延松といふは。南は三谷を越北は七谷に蔓延て。それ幹の在所を知りのあるとは。いとあるは大樹乃今に存るもいとまれなり。いづれもこの歷木を扶桑木なりといふは。實に僻言なることは。先人も既にこれをいふりのあり。扶桑木の殊に勝て大なることは。東方朔が十洲記に有椹樹長者數千丈太二千餘圍。兩〻同根偶生。更相依倚是以名扶桑といふ。枝と枝と交り倚て延たるは。あたかも樹のごとくにはあれども椹樹多くありて。且その最長きものは數千丈にもなる物のあるべし。漢土は我邦を扶桑國ともいふは。此は椹といひ桑といふをかりて。扶桑といふ。ものさしく桑樹のこゝにいふ。淮南子にも。日出于暘谷。浴于咸池。拂于扶桑。是謂晨明といひ。また日と木と殘合せて。日出て木中に在を形容て東字を製し。日昇て木上に在を以て杲字とし。詩にも。杲〻出日と詠。反景桑榆の間に照る殘日の木下に在を象て杳の字

とせゝゞ如き。悉皆扶桑樹より字を製せゝゝと。説文の段玉裁ゞ説ふものゝ。これ扶桑木の在ゝ所ゝ筑紫の西邊あて殊ふ勝こる大樹ゝゝゞ故ふ漢土より遥ふ望見こるものと知まてるゝ。山海經ふ流沙三百里至于無臯之山南望幼海東望博桑などいひ其他の賦ゞどに。臨覽こるゝと詠ゝこるをおりゝゝその高さ此歴木の類ふあゝゝゝゝゝこるなる大樹ふやありけん今にありていこれを知ゝもゝゝ孫ど十州記ふ數千丈とある。數とは。三以上七以下をいふとゆるふ從てこれを漢の世は尺度ふて算ゝゝゝ今の三里ふ餘ぬゝゝ。かゝゝゝゝゝ冨嶽を西りゝゝ累こるゝゞこの高さあるゝゝゝゝゝゝゝゝゝ漢土ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ